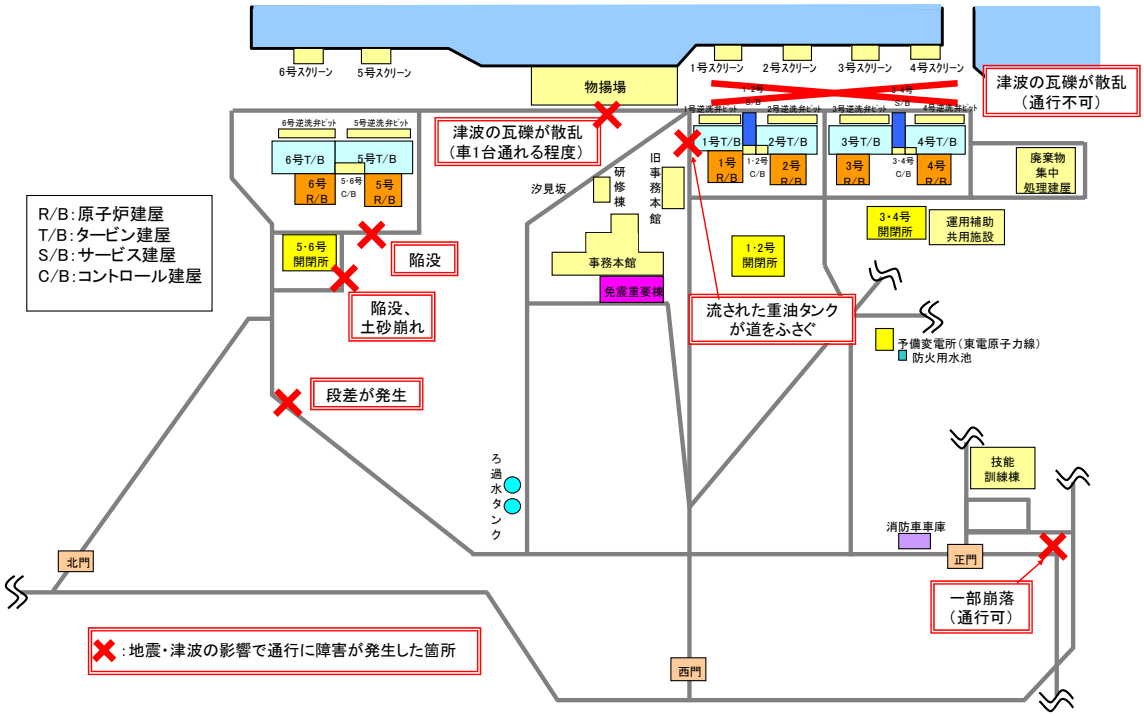
照明，計器復旧によって，プラント状態を把握するための監視手段が少しずつ確保されていく一方，現場は依然として真っ暗で，限られた通信手段の中，余震・津波警報が継続する状況下での対応が続いた。

家族の安否確認が出来ない中で対応を続ける社員も多かった。当日勤務ではなかった社員も，家族と一緒に避難所に向かう途中で発電所に行く決意をし，車を降りて発電所に向かった者，地域の消防団で活動した後に発電所に向かった者など，それぞれの状況に応じて，発電所に続々と駆けつけた。事態を収束し絶対にここを出て家族に会おうと励まし合ったり，現場で汚染して廃棄処分となる危険性がある中で，もしもの時に自分の身元が分かる手がかりになるかもしれないと思い，家族からもらった大事な時計や指輪をお守りとして身につけて現場に行く運転員もいた。

このような状況の中，発電所長の指揮の下，原子炉注水，格納容器ベント，電源復旧といった事故収束に向けた対応が行われた。（詳細は，別資料「注水に関する対応状況」「格納容器ベント操作に関する対応状況」「電源復旧に関する対応状況」参照）



福島第一原子力発電所の構内図

以　上